

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	坂口安吾「日本文化私観」試論：日中比較と複数の「必要」の関数化をめぐって
Author(s)	萬田, 慶太
Citation	近代文学試論, 61 : 37 - 48
Issue Date	2023-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54894
URL	https://doi.org/10.15027/54894
Right	
Relation	



坂口安吾「日本文化私観」試論

——日中比較と複数の「必要」の関数化をめぐる——

萬田慶太

一、はじめに

日本人にとって、坂口安吾「日本文化私観」(『現代文学』一九四二年三月)は高校国語教科書に採択され、一度は読んだことのある文章である。数多くの日本論が書かれ、海外でも日本論が成熟した。いまだに安吾の「日本文化私観」が読まれる背景には、教科書採択と日本人のセルフイメージの影響がある。

例えば、高校三年生向け『精選 現代文B』(教育出版社、二〇一九年一月)では、グローバル化の中のナショナルリズムを背景として「日本文化私観」は収録された¹⁾。日本文化のセルフイメージを規定させるねらいがここにはある。同時収録された評論は、夏目漱石「現代日本の開化」(『朝日講演集』朝日新聞社、一九一一年十一月)、谷崎潤一郎「陰翳礼讃」(『経済往来』一九三三年十二月、一九三四年一月)などである。

教科書の目標設定には、「予習」として(1)筆者が、「小菅刑務所」、「ドライアイスの工場」、「駆逐艦」から感じ取った「美しさの正体」、(2)「猿真似」にも、独創と同一の優越がある²⁾に見られる、筆者の日本文化に対する考え方が指示されている。(1)に関しては、機能美が想定されている。(2)に関しては、近代日本文化は西洋の猿真似であり、矛盾を抱えているが、機能美を実現することによって西洋(ある

いは東アジア)に対して優位に立てるとの答えが想定されている。

また、「活動」として、「2この作品が発表された時代状況を調べ、「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。」という表現には、筆者のどのような意図がこめられていたのか、考えてみよう」と設定される。

「予習」として想定された、機能美を求める「猿真似」が、「法隆寺や平等院」を「焼く」という物語が想定されている。そして、生徒に感想を提出させれば、「近代的矛盾を肯定するのは環境によくない」とか、「犠牲があるにせよ、近代化を優先するべきだ」との答えが返ってくるだろう。しかも、それは戦前の「時代状況」と接続される。近代的矛盾が戦争を招く時代であるか、戦前が失敗はしたが日本文化の独自性を求めた時代であったと解釈される。日本人にとって、既に一度西洋文化に追いついた日本はセルフイメージとして心地の良いものである³⁾。

『精選 現代文B』(教育出版社、二〇一九年一月)は、これからふれる西川長夫論、笠井潔論、柄谷行人論を背景に成立している。これらは安吾研究の基礎になっている。

西川長夫は「二つの『日本文化私観』——ブルーノ・タウトと坂口安吾」(『国境の越え方』筑摩書房、一九九二年一月)において、はじめてタウトの『日本文化私観』(明治書房、一九三六年十月)と安吾のテク

ストを比較した。西川はタウトに文化相対主義の萌芽を感じ取りながらも、「傲慢とオリエンタリズム」を指摘する。西川は「文化は交流する」「文化は変容を続けている」「模倣を通じて発見へ」「文化とは生活の問題であり、究極的には個人の選択と決断」と読解している。

笠井潔は「第四の選択」「真珠」と「日本文化私観」(「現代思想」一九九〇年八月)において、「真珠」(「文藝」一九四二年六月)との関連を指摘し、保田與重郎や横光利一、田辺元などの日本礼賛論と安吾の隔絶を論じた。

柄谷行人は「日本文化私観について」(『坂口安吾と中上健次』太田出版、一九九六年二月)において、安吾の「必要」に注目する。柄谷はマルクスを引用し、「宗教(幻想)の反対物は非宗教(啓蒙主義)ではない、『現実』であり、その現実を安吾は「必要」としたと論じる。ここでは安吾の「必要」はカントの「物自体」と比較されている。

西川論が提出したオリエンタリズム批判、笠井論が提出した「真珠」や戦中日本論との比較、柄谷論が提出した「必要」論は後続の研究にも引き継がれる。

Paul Ziegler は「二〇〇の『日本文化私観』に介在する文化の問題」(『国際経営・文化研究』二〇〇一年一月)において、安吾のタウトへの批判的パロディを原文から綿密に検討している。

花田俊典は「悲願について——坂口安吾「日本文化私観」再考」(『大日文』二〇〇三年十月)において、西川論と柄谷論を比較し、タウトや他の日本文化論にも機能主義やナショナリズムの行き過ぎを非難する言説を見出す。安吾はタウトのパロディをしたに過ぎないと花田は指摘し、安吾のオリジナルな部分として「必要」が「悲願」とされた時

美学になる構造を分析する。花田は大東亜戦争肯定論として読めることを認めながらも、「もしそれが「悲願」としての「必要」であるならば」という「条件」を課したと論じた。

昨今は「日本文化私観」はあまり論じられていない。例外的に加藤達彦「安吾とタウトの想像力——二つの「日本文化私観」をめぐる」(『坂口安吾研究』二〇一六年三月)は、「必要」が機能美と結びつくことを否定し、「美の内容を変更」したと論じる。本論もまた、「日本文化私観」の「必要」は機能美ではないと考える。

先行研究は主にタウトとの比較、オリエンタリズム批判によって左右されてきた。オリエンタリズムと西洋思想の共犯関係を指摘する西川論は強力だった。結局、西川論はグローバル化の中の日本人のセルフイメージに利用されることになった。本論ではそのような議論とは少し別の角度から論じる。

まず、本論では日本論を取り巻く文化状況について、現代の文脈も踏まえながら論じる。特に日中比較論を取り込み、近代Ⅱ西洋化という解釈に異を唱える。また、日本の近代文化は西洋の猿真似であるという文脈も強調しない。近代を多国間の翻案として多項的に見る観点を持ち込む。次に、「日本文化私観」において、多項的な分析がもつとも必要とされる百メートル走について注釈する。本論の目的は注釈という行為によって「日本文化私観」を読解することである。百メートル走の箇所は先行研究で多く取り上げられた「小菅刑務所」と「ドライアイス工場」、「駆逐艦」のあとにふれられている。百メートル走について注釈した先行研究は存在しない。次にイー十六型戦闘機について注釈する。この箇所もまた、先行研究では言及されていない。最後に注釈という行為

によって浮かび上がる、安吾にとって「必要」とされた百メートル走の合理性の観念とは何かを考察したい

二、日本論の文化状況

安吾は「日本文化私観」において、東京でタウトが講演した時のことを語る。タウトのような知識人は世俗的に権威を獲得した。そして、彼らに学ぶ大衆という文化状況が近代、発明された。学問と講義という構造が日本でも整備される。もちろん、ここに世界各都市の大学組織も関わってくる。聴衆はこう描写される。

聴衆の八、九割は学生で、あとの一、二割が建築家であったそう。東京のあらゆる建築専門家に案内状を発送して、尚そのような結果であった。ヨーロッパでは決してこのようなことは有り得ないそうだ。常に八、九割が建築家で、一、二割が都市の文化に関心を持つ市長とか町長という名誉職の人々であり、学生などの割りこむ余地はないはずだ、と言うのである。

安吾は日本の知的資本への軽視を語る。夏目漱石もまた、「現代日本の開化」(前掲)において、「あなた方は講演よりも茶菓子が食いたくなくたり酒が飲みたくなったり氷水が欲しくなったりする」と怠惰な聴衆にふれている³。

要するに、日本人は建築家や仏教家であっても、社会に出て就職すると勉強しなくなる。学生は勉強するが、暗記型であり、思想的でない。ここで参照すべきは、坂口安吾「勉強記」(「文体」一九三九年五月)で

ある。

「勉強記」において、「誰でも無試験で入学できる学校の印度哲学科」の「穏良な坊主の子弟」の間に栗栖按吉は突如、入学する。坊主の子弟は皆、大学に入ると髪を伸ばすのに、栗栖は坊主頭である。先生は「喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらって」いない。栗栖は「先生の言葉を真剣にきいている生徒」であるが、先生の話すことは理解できない。栗栖は最後に「管長候補」の僧侶も芸者遊びをすることに「割り切れない」気持ちになる。

安吾の日本仏教批判と同様の指摘を現代に行っているのが、井上章一『京都ざらい』(朝日新書、二〇一五年九月)である。「僧、芸子、僧、芸子……と、かわりばんこにすわって」おり、「彼らは、衆人環視のなかで、誰はばかることもなく、芸子たちとたわむれあっていた」と井上は言う。井上は「稚児愛の歴史がわすれられ」、「聖職者集団の世俗化を達成」させたとそれを肯定する。テロリズムに走るイスラム圏の宗教心と比較し、「ああいうふうには、あそびほうけているあいだは、信仰がこわばることもないだろう」と井上は言う。

また、同時に井上は安吾も焦点を当てた「龍安寺の石庭」などの建築物についてもふれる。安吾は、「龍安寺の石庭」の「石の配置が如何なる観念や思想に結びつくかも問題ではない」と言う。芭蕉は「庭をでて、大自然のなかに自家の庭を見、又、つくった」し、「大雅堂は画室を持たなかつたし、良寛には寺すらも必要ではなかつた」と安吾は言う。建築に深淵な意図を見ようとするタウトは日本の寺院を見誤っている。寺も世俗的な理由から建築されているのである。

井上は京都の寺院建築物について、「拝観料の収入」源としての側面

を指摘する。京都市の財政は観光によって保たれていると井上は言う。井上の『京都ざらい』は、日本論という学問構造自体に分析が及ばず、京都が保存してきた日本を無条件に肯定する姿勢を批判した。

海外の大学でも講義される日本論自体がこのような矛盾を抱えてきた。日本論は構造的な問題を抱えており、国家のイメージ戦略の側面がある。新戸部稲造『武士道』(“BUSHIDOU, THE SOUL OF JAPAN” 1899, The Leeds and Biddle Company) 和辻哲郎『風土』(岩波書店 一九三五年九月)、九鬼周造『いきの構造』(岩波書店、一九三〇年十一月)、ルース・ベネディクト『菊と刀』(“The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture” 1946, Houghton Mifflin Company)などは日本論の古典として挙げられる。これらはそれぞれキリスト教、現象学、文化人類学などの構造的問題点が指摘されている。

日本論はいずれも西洋に对照可能な日本文化の美的側面を語る。そもそも国語教科書が表現している、日本の近代化は西洋化と言えののだろうか。国語教科書は、日本は近代化の努力をし、そのために多くを犠牲にしたという物語を作っている。犠牲になるのは、学問的な日本論で表現されるよき日本文化である。同時にそれは戦後から八十年代の日本バブルのイメージにも投影された。ここでいう近代化とは全く西洋化であり、多くの日本人が列強に追いつくため、日本は努力したと考えている。また、バブル期も日本人が努力によって経済繁栄を成し遂げた結果と考えている。

しかし、実際には現在生きている多くの人々が歴史を三十年から五十年程度しか知らない。歴史は実感を伴ったものではなく、知識や伝聞情報でしかない。経済的な興隆など、人口増と産業構造の変化によって、

個人の努力によらず可能なのであり、近代日本にしろ、バブル期の日本にしろ、日本人が努力したというのは物語に過ぎない。近代を矛盾したものと語るマルクス主義的な言説もまた近代的努力を前提にする発想と共犯関係にある。

そもそも近代といった観念自体が国によって大きく異なるというのが実情である。ヘーゲルが『精神現象学』(原著“Die Phenomenologie des Geistes”1807, Verlag Joseph Anton Goebhardt. 檜山欽四郎訳平凡社、一九九七年六月、七月)や『歴史哲学講義』(原著“Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte”1837, von Dr. Eduard Gans・長谷川宏訳 岩波書店、一九九四年六月、八月)で想定していた近代や民主主義とは、フランスやドイツ領邦制国家であり、都市と大学の書物によって浮かび上がるギリシャ哲学であった。ギリシャ語をフランス語やドイツ語に翻案することで近代や民主主義が成立したと言っている。そこでは広大な植民地を有していながらも、世界とは西洋を意味するものでしかなかった。近代が地球全体に広がることは想定されず、無謀な試みとして排除されていた。近代とは欲望の重ねあいであり、一方的な西洋化ではない。近代とは生成変化であり、西洋と東洋の同時進化なのである。特に東アジアの近代は単純な植民地化でない複雑な過程を経た。つまり、両者の欲望が混ざり合い、むしろ欲望が関係に入り込んでからはじめて生じ、発見されるような産物だと言える。西洋側の欲望もまた変質したのである。⁴⁾

これらの観点から日本論に問題提起をしているのが、與那覇潤『中国化する日本』(文芸春秋社、二〇一四年五月)である。與那覇は日本の近代を西洋化とは見ない。むしろ、パラダイムは宋代(近世)の中華秩

序にあったとし、日本史を江戸時代化と中国化の二分極で見る。宋は貴族制度を全廃し、科挙による登用制を敷いた。これはある種の平等主義と言える。そして、宋は地方豪族が権力を握りやすい封建制を廃し、中央から官僚を派遣する郡県制を敷いた。統治形態のみを見れば、現代の日本も中国も宋代とあまり違いはない。與那覇の提唱した近世にパラダイムシフトを見る発想は、日本史を単純な西洋化と見る観点からは画期的である。

安吾は「日本文化私観」の中で、隠岐和一に「京都で何が見たいか？」と問われ、「祇園の舞妓と猪だとウツカリ答えて」しまう。京都イメージとして浮かんできたのが舞妓であった。舞妓には児童買春との批判がされつつも、いまだ日本を代表するものとして根強くイメージされている。

舞妓を安吾は吉原文学に描かれたような「特別の教養を仕込まれているのかと思っていたら、そんなものは微塵もな」と言う。「ターキートオリエ」というレビューのスターのミーハーでしかない。

ここで比較として提出されるのが中国の「盲妹」である。この箇所しかし安吾の日中比較が見出せる場所はない。「盲妹」は中国の都市伝説である。「盲妹」は「小さいうちに盲にして」娼婦にすると言う。「支那人のやることは、あくどいが、徹底している」と安吾は言う。中国は安吾には封建制が敷かれている国としてゴアなイメージをされている。中国の封建制を日本と同根だが、もっと徹底したものと安吾は見ている。封建制下の女性人権無視が安吾にとっては恋愛関係に合理的であるらしい。

近代とは多国間の翻案であり、純粋な西洋化ではない。そして、近代

化という目標も多くの国家によって異なる。近代とは何を意味するのだろうか。国民皆教育、議会の成立、共通言語、道路をはじめとした各種インフラ整備、軍隊、政治的平等性。それぞれの重みの置き方が各国文化圏によって異なる。

二〇二〇年代の中国は近代化をIT技術を利用して成功させようとしている。多くの日本人が現在、「中国は昔の日本であり、日本のバブルの歴史を繰り返しつつある」と怨恨まじりに語る。国語教科書も一度は西洋化を成し遂げた国として日本を語る。しかし、歴史が多国間の翻案であり、直線的でない以上、同じ歴史を繰り返しているとは言えない。日本の一九八〇年代のバブル景気は経済学においては古典的課題であり、もう同質のバブル崩壊は常識として起きない。中国経済が凋落するかどうかは判断できないが、日本と同様の事態ではない。文化の分析は直線的ではなく、多項的でなければならぬ。日中は単純比較では分析できないのである。

以上、日本論の現状を導入することで日中比較の観点から「日本文化私観」が提出している問題を析出した。国語教科書に見られるような「日本文化私観」の読解は、多項的な近代の分析によって否定されなければならない。では次は、そのような近代の多項的な分析がもっとも「日本文化私観」の中で噴出した百メートル走について注釈しよう。

三、百メートル走の英雄オーエンス

安吾は「日本文化私観」の中で「小菅刑務所」と「ドライアイス工場」、「駆逐艦」の美を「懐かしいような気持ち」で眺める。「ほかのどのような旧来の観念も、この必要のやむべからざる生成をばむ力とは成

り得なかった」と安吾は言う。他人にとっては理解できないが、当事者にとっては必要なものとして考えられる「必要」を安吾は想定した。

「日本文化私観」の中で「必要」の多項性が顕著に現れるのが、その後の百メートル走の部分だ。

百米を疾走するオウエンスの美しさと二流選手の動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさと、応じ切れないギゴチなさの相違がある。僕が中学生の頃、百米の選手といえば、痩せて、軽くて、足が長くて、スマートの身体でなければならぬと極まっていた。ふとつた重い男は専ら投擲の方へ廻され、フィールドの片隅で砲丸を担いだりハンマーを振り廻していたのである。日本へも来たことのあるパドック達のシムプソンの頃までは、そうだった。メトカルフだのトーランが現れた頃から、短距離には重い身体の加速度が最後の条件であると訂正され、スマートな身体は中距離の方へ廻されるようになったのである。

「オウエンス」は一九三六年のベルリンオリンピックで黒人選手として出場し、金メダルを獲得したジョージ・オーエンス（一九一三—一九八〇、アメリカ）である。「パドック」は、チャールズ・パドック（一九〇〇—一九四三、アメリカ）という陸上選手である。パドックはオーエンスにも影響を与えた前世代の百メートル走ランナーであった。パドックは一九二〇年のアントワープオリンピックと一九二四年のパリオリンピックの百メートル走で金メダルを獲得している。「シムプソン」は、ジョージ・シンプソン（一九〇八—一九六一、アメリカ）という陸

上選手である。シンプソンは一九三二年のロサンゼルスオリンピックで百メートル走4位の成績を残した。「メトカルフ」はラルフ・メトカーフ（一九一〇—一九七八、アメリカ）という陸上選手である。一九三二年から一九三四年までは世界記録保持者だった。メトカーフは黒人であり、一九三三年のロサンゼルスオリンピックと一九三六年のベルリンオリンピックの百メートル走で銀メダルを獲得している。「トーラン」はエディ・トーラン（一九〇八—一九六七、アメリカ）という陸上選手である。トーランは黒人であり、一九三二年のロサンゼルスオリンピックの百メートル走で金メダルを獲得している。いずれもアメリカのスター陸上選手である。⁵⁾

ベルリンオリンピックでもアメリカの優勝は決定的で、注目されたのは白人種と黒人種どちらが金メダルを獲得するかということであった。安吾は人種言説を判断し、体形に注目する。安吾は「パドック達のシムプソンの頃まで」は、「スマートの身体でなければならぬと極まっていた」と言う。安吾は「オウエンス」と「メトカルフ」と「トーラン」の頃から、「短距離には重い身体の加速度が最後の条件であると訂正され」たと言う。

安吾が挙げた陸上選手の身長体重を比較してみよう。「痩せて、軽くて、足が長」いとされたシンプソンは180 cm 75 kg、パドックは172 cm 75 kgである。「重い身体の加速度」が重要になったと言われる時代のオーエンスは178 cm 71 kg、メトカーフは180 cm 82 kg、トーランは170 cm 65 kgである。⁶⁾身長体重だけで比較すると安吾の分析には矛盾がある。選手たちは理想的な体形であり、特別太っているようには見えない。もちろん、ハンマー投げの選手の重い身体と百メートル

ル走の選手のスマートな身体は比較にならない。

この部分は安吾の印象批評によるものである。情報源は記録映画や新聞の写真だろう。また、安吾の体育教練へのルサンチマンも関係している。

ベルリンオリンピックはレニ・リーフェンシュタールの映画『オリンピア』(Leni Riefenstahl, April 1938, Olympia Film)で有名である。ベルリンオリンピックはナチス政権の国威発揚に使われた。百メートル走は目玉競技となり、オーエンスの走りは大衆を魅了した。

日本オリンピックアカデミー編『オリンピック事典』(ぼるぶ出版、一九八四年一月)の「ベルリン・オリンピック」の項目は、「別名「ナチスのオリンピック」ともいわれたが、良くも悪しくこの大会でオリンピックという形式のものが最高度に花開いたことは間違いない」と言う。特にオーエンスは「大会の生んだ英雄」と呼ばれ、「100m、200m、400mリレー、走り幅跳びに4個の金メダルを安々と獲得した」と記述される。

ベルリンオリンピックの記録である、リチャード・マンデル著、田島直人訳『ナチ・オリンピック』(原著“The Nazi Olympics”1971, MacMillan Publishing Company、ベースボール・マガジン社、一九七六年三月)においては、当時百メートル走の「一〇・三秒の世界タイ記録保持者が三人」おり、「前回の銀メダリスト、ラルフ・メトカルフ、オランダのクリスチャン・ベルガー」、オーエンスであった。オーエンスは決勝戦で「一〇・二秒という世界新記録をだした」が、「結果的にその記録は追風ということで、公式には認められなかった」と言う。

後世の書物ではオーエンスはナチスの野望をスポーツで打ち破った

英雄として表象される。彼は世界中の足が速い少年少女たちの伝説になった。子供向けの絵本であるジェフ・バーリングゲーム著、古川哲史訳『走ることは、生きること——五輪金メダリスト ジェシー・オーエンスの物語——』(原著“Jesse Owens: I Always Loved Running”2011, Enslow Pub Inc. 晃洋書房、二〇一六年七月)においては、「独裁者の野望をくじく」などの見出しで、黒人奴隷を先祖に持つオーエンスが人種迫害政策の続くドイツで金メダルを獲得したことを表象する。また、晩年の裁判や結婚を認めてもらえなかった逸話も紹介している。

一方、オーエンス自身にはベルリンオリンピックを懐かしむ逸話も残されている。武田薫『増補改訂 オリンピック全大会 人と時代と夢の物語』(朝日新聞出版、二〇一九年八月)においては、「ヒトラーはオーエンスと握手をせずに引き揚げたと伝わるが、オーエンス自身は「彼は私が手を振ると手を振ってくれた」と語り、町では子供たちや市民たちから握手やサイン攻めにあつた」と言う。「むしろ、合衆国大統領フランクリン・ルーズベルトからは祝電も届かず、ホワイトハウスに招かれることもなく、祖国の陸連からは何一つ榮譽を与えられず、(黒人専用)のレストランで食事をしなければならなかった」ことはオーエンスにとって不満だった。「アスリートとしてのオーエンスにとって、ベルリンは最高の舞台であった」と言う。白人種の優秀性をナチス政権が主張しようと、アメリカの陸上競技の勝利をドイツの大衆は知っていた。オーエンスの記憶とドイツ大衆の熱狂⁷にも関わらず、ヒトラーは内心では黒人選手のコメダルを祝福していなかったようだ。デイヴィット・クライラー著、高儀進訳『ベルリン・オリンピック1936 ナ

チの競技』(原著“Nazi Games: The Olympics of 1936”2007, W W Norton & Co Inc; Annotated. 白水社、二〇〇八年七月)においては、以下のようなナチス政権の発言が記述されている。

アルベルト・シュペーアによれば、黒人がいくつもの種目で優勝したのは、彼らに特に強靱な肉体を与えた「密林の遺伝形質」のおかげだとヒトラーは信じていた。ヒトラーはまた、黒人は「人種的に有利に条件付けられているので」、将来のオリンピックから除外されるべきであるとも、シュペーアに語った。(中略)ゲッペルスはドイツの新聞に、黒人選手の感情を傷つけないようにという指示を出したものの、内心では、黒人選手がベルリンにいることに強い不快感を抱いていた。彼は日記の中で、オーエンスが百米メートル競走で優勝した日は「白人種にとって屈辱の日」で、アメリカ選手団は「恥じ入るべきだ」と書いた。そしてのちに、レニ・リーフェンシュタールに対し、ベルリン大会の映画からオーエンスを撮ったフィルムを大幅にカットさせようとしたと報じられている。

ホストとしての義務とドイツの大衆の熱狂から、公にはナチス政権は黒人選手を歓待した。しかし、日記や発言の記録などでは、あからさまに差別していたようだ。いずれにせよ、オーエンスのフォームが理想的であったことは間違いがなく、安吾はドイツの大衆と同様に熱狂し、そこに「必要」を見出した。「日本文化私観」においては、人種言説が切斷され、体形の美学が構成されている。この箇所は「日本文化私観」における黒人言説であった。では、次に安吾がふれている「イー十六型

戦闘機」についての注釈にうつろう。

四、鹵獲された「イー十六型戦闘機」

戦闘機に関して、安吾は「日本文化私観」の中で以下のように述べている。

いつか、羽田飛行場へかけて、イー十六型戦闘機を見たが、飛行場の左端に姿を現したかと思ううちに右端へ飛去り、呆れ果てた速度であった。かつての日本の戦闘機は格闘性に重点を置き、速力を二の次にするから、速さの点では比較にならない。イー十六は胴体が短く、ずんぐり太っていて、ドツシリした重量感があり、近代化の百米選手の体格の条件に全く良く当てはまっているのである。スマートな所は微塵もなく、あくまで不恰好に出来上がっているが、その質量の加速度によって風を切る速力的な美しさは、スマートな旅客機などの比較にならぬものがあつた。

見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。

「イー十六型戦闘機」とは、ノモンハン事件で鹵獲されたソビエト連邦のイー16戦闘機のことである。安吾は日本と西洋のみならず、日本とソ連の比較まで行う。雑文で書きつくす安吾は裏付けられた資料によつてではなく、美学的に考察を展開している。百米メートル走と戦闘機を接続してしまう強引さからもそれはうかがえる。

第二次大戦初期の戦闘機は、複葉機から単葉機に更新されつつあつ

た。また、ドイツのbf-109の成功から、重戦闘機に移行しつつあった。空中での旋回を用いた格闘戦を得意とする軽戦闘機に対し、重戦闘機とは直線的な最高速度を求めめる一撃離脱戦法に徹した戦闘機のことである。重戦闘機は各国で開発が求められていた。

I-16戦闘機の情報を『世界の傑作機No.133 ポリカルポフI-16』(文林堂、二〇〇九年七月)から引用する。I-16戦闘機はポリカルポフ設計局により、開発された。ポリカルポフは政治的な罪で逮捕されていたが、イリュージョンの元、戦闘機の設計を開始する。複葉軽戦闘機のI-15と同時開発され、I-16は重戦闘機として設計された。格闘戦をI-15が、高速の一撃離脱をI-16が担当する戦術であった。一九三四年にI-16は生産され、スペイン戦争に義勇軍として派遣された。また、日中戦争にも貸与という形で投入された。I-16がもつとも活躍したのはノモンハン事件においてである。独ソ戦にも投入されたが、I-16は既に老朽化していた。各型式によって最大速度は違うが、高度3000mを時速430km以上で飛行できた。当時としては高速である。

安吾は「日本の戦闘機は格闘性に重点を置き、速力を二の次にする」が、「I-16は胴体が短く、ずんぐり太っていて、ドッシリした重量感があり、近代化の百米選手の体格の条件」と同じだと言う。I-16は全長5.9mほどで日本の軽戦闘機と比べ、太く短いスタイルをしている。鹵獲されたI-16の写真が残っていたので、参照していただきたい。(写真1参照。)

重戦闘機の設計は速度を求め、大馬力のエンジンを搭載するので、質量は軽戦闘機より重くなる。しかし、「質量の加速度」が発生するわけ

ではなく、降下性能はよくなるが加速性能は上昇しない。

「胴体が短く、ずんぐり太っているI-16の設計は、空気抵抗の観点から採用された。ポリカルポフは「大出力エンジンの小さな飛行機」を求めた。鳥養鶴雄は「回想の中のプロペラ戦闘機、I-15とI-16」(『世界の傑作機No.133 ポリカルポフI-16』前掲)において、「胴体の空気抵抗はズングリしているほうが小さい」と分析している。これらは風洞実験によって確かめられており、「短いほうが表面積が小さくなり、摩擦抵抗が小さくなるから」である。胴体の長さの切り詰めは日本の戦闘機雷電でも採用された思想である。一方でスマートな形の戦闘機は「プロペラの後流の縮流域にある胴体の環境は風洞試験と条件が異なっており、「空冷星型エンジンの直径に合わせ、ギリ、ギリに細くすることが必要」なことからそのような形になっている。

当時、ソ連の戦闘機I-16には日本国内ではさまざまな意見があったようだ。鳥養は一九三九年鹵獲されたI-16を靖国神社で目撃し、「こんなヒコキに日本の戦闘機が負けるわけがない。I-16はベニヤ板で作られているのだ。なにしろロシアでは日本では弁当箱にも使われているアルミニウム合金がつくれないのだ」と教えられた」と言う。I-16はモノコック構造の木金混製という大戦初期の戦闘機の特徴を残していた。

渡辺一英、野村泰共著『世界の戦闘機』(航空時代社、一九四四年五月)は、同盟国であるドイツのbf-109を重戦闘機として称賛する。一方で、重戦闘機の開発は失敗することが多いとふれ、アメリカのp-40を「世界一弱い戦闘機」とけなす。I-16は写真付きで掲載され、「軽金属の骨格に合板モノコック製の胴体、羽布張りの主翼と云ふ一



写真1 「世界の傑作機」133 ポリカムボア1-16 (文芸堂、二〇〇九年七月) より

風変わったもの」と言う。ノモンハン事件については、「水平速度や火力については我に遥かに勝つてゐたのであるが、これに対する我が九七戦闘機は、軽戦機として独特の適度な速度と卓抜せる上昇力と、運動力とを最大限に發揮し、しかも先天的に軽戦の戦闘技術を持つ操縦者を得て、執拗な巴戦に誘ひ込んで近距離より的確な射撃を以て常に勝を制したのであつた」と言う。また、重戦闘機の時代を認めつつも、「速度偏重主義の戦闘機が、極度に総合性能を重視して完成した軽戦との戦闘で、案外に手痛い損害を被る」と言う。

また、日本も重戦闘機の開発に踏み切っていることを語る。

枢軸国の戦闘機をほめ、連合国の戦闘機をけなす言説が構成されている。ノモンハン事件の航空戦については、現代でもソ連と日本どちらかが勝利したか、意見が分かれている。最終的に日本の関東軍は撤退した。ノモンハン事件で日本がかなり損害を被つたということ噂は伝わり、「日本文化私観」でも婉曲に表現されている。結局、安吾のI-16の比較対象は、日本の軽戦闘機から「スマートな旅客機」に移る。要するに、安吾はソ連という共産国がスマートさの実感を裏切る「必要」を提示し、美的に優れていると言いたいのだ。

このように「日本文化私観」の百メートル走と戦闘機について注釈した。最後に、百メートル走を早く走るためには、どのような技術が必要とされ、どのような合理的な関数が必要とされるのか、検討する。そこから安吾の思想を考察したい。

五、結論——複数の「必要」の関数化——

本論では、まず日本論の現代的状況を検討し、多国間の翻案と多項分析が必要なことを示した。次に百メートル走のスター、オーエンスについて注釈した。安吾は百メートル走に必要な身体について黒人言説を分割し、体形の美学を構成しようとしていることがわかった。次にI-16戦闘機について注釈した。I-16戦闘機は特異な形態をしており、ソ連という共産圏の美学によって、日本の戦闘機と比較して、実感を裏切る合理性が表現されていると安吾が分析しようとしているとわかった。しかしながら、安吾の比較は多岐にわたり、印象批評に近いため、矛盾する箇所が多いことも注釈によって明らかになった。

では、安吾が「日本文化私観」の中でふれた「短距離には重い身体の加速度が最後の条件である」というのは、真実なのだろうか。

ジェフリー・ダイソン著、金原勇訳『陸上競技の力学』(原著“The Mechanics of Athletics”1970, University of London Press Ltd. 大修館書店、一九七二年十月)によれば、「加速運動」の項に、「等しい力が等しくない質量に加速度を与えるときは、質量と加速度の積は同じである」とある。つまり、ニュートンの第二法則「力 \parallel 質量 \times 加速度」である。結論として、「たとえ250ポンドと125ポンドの2人の走者がいるとすると、同じ加速度を生ずるためには、重い人は軽い人の2倍の力を出さねばならない」と言う。したがって、摩擦力や回転力、重力、筋力等の影響を完全に無視した場合、「重い身体の加速度が」優位という安吾の考えは誤りである。

これと同様に戦闘機に対して安吾が述べた、「質量の加速度によって風を切る速力的な美しさ」というのも誤りである。I-16が「胴体が

短く、ずんぐり太つてい」るのは、空気抵抗の点から採用されている。

重戦闘機は高出力エンジンを搭載し、軽戦闘機より重いが、より大きな速力を発揮する。I-16もコンパクトにまとめることを求めており、航空機が重ければよいわけではない。航空機の場合は、質量は巡航時に水平飛行のつりあいに影響する。飛行機には水平方向に推力が働き、上方向に揚力が働き、下方向に抗力が働いている。(河崎俊夫『飛行機雑学事典 最新技術のすべて』講談社、一九八二年三月参照。)質量は重心の管理に作用し、重心による空中の安定性は三軸方向のロールに働く。(『飛行機の百科事典』丸善株式会社、二〇〇八年十二月参照。)

では、百米メートル走の速力を求めるのに、スポーツ力学によってどのような「必要」が求められるのだろうか。「内的には、筋の粘性、筋膜・靭帯・腱などの緊張による抵抗を克服することと、「外的には、重力、空気抵抗、地面によってランニングシューズにかけられる力」などが関係する。「ストライドの長さ」と「ピッチ」によって走るスピードが決まる。走者の体重や筋力が正しいつりあいにあっては時に効率は最大にならない。身体重心は前方に、そしてより大きな力を後方にキックしなければならぬ。走る時、このキックの力と次の足を前方に出す骨盤を軸とした回転の力が求められる。これらの衝撃は両腕と骨盤で吸収されなければならぬ。(ジェフエリー・ダイソン『陸上競技の力学』前掲参照。)

短距離走には爆発的なエネルギーと酸素効率を必要とする。短距離走選手は身長体重比がよいというよりも酸素効率が非常によい傾向にある。短距離走にはスタート時の瞬発力、0～60mの加速走の筋持久力が求められる。短距離走には、①スタートの構えと出発動作②加速走③全速走④スピード持続走⑤フィニッシュの五つの区分がある。全速走時

はトップスピードの運動になり、加速走の力を利用する。スピード持続走においては、全速走の余力を長期に持続することが求められる。(浅見俊男編『現代体育・スポーツ体系第13巻』講談社、一九八四年六月参照。)

このように百米メートル走においては、複雑な段階があり、複数の合理性が「必要」とされる。それぞれの段階において、質量やそれが生み出す筋が発生させる力、働きかける重心、回転数などの「必要」はそれぞれ別である。

このような複数の合理性が「必要」とされた時求められるのが、それらを総合した数式であり、グラフであり、関数なのだ。安吾は「百米を疾走するオウエンスの美しさと二流選手の動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさと、応じ切れないギゴチなさの相違がある」と言う。オウエンスは各段階における複数の合理性を統一しうる、ベストな身体性を持っていた。

「必要」にも、やみくもに何もかも欲しいと思う単純な欲望や機能美と、それとは別の複数の合理性とそれを統一する関数が存在する。そして、その「必要」は差異化され、秀逸化されることがある。いまだ人間の身体をもって、百米メートル走の完全な速度を実現するスポーツ理論は、明らかになっていない。現代においても、人間の身体の可能性は未解明な部分が多い。そのような、複雑で多項的な比較こそが、文化比較に必要とされる観点である。

第二節でふれたように、日中比較においても、単線的に「中国は昔の日本であり、日本のバブル崩壊の歴史を繰り返しつつある」と怨恨まじりて語ることによっては成り立たない。たとえ不愉快であったとして

も他国から学ぶことをしなければ、日本文化は失墜するだろう。国語教科書のように日本が一度は西洋化を成し遂げた国として語られることも異論が提唱されている。決定要因は近世の中華秩序にあったという分析も成立する。近代を東アジア側の欲望を反映し、西洋側の欲望も変質したものとしても分析すべきである。歴史は複層的な産物なのだ。複雑比較に必要なのは多国間の翻案であり、多項分析である。二元論だけでなく、四、五個のコーパスを設定して、各国文化圏の重点の置き方を測定する必要がある。オーエンスの身体は、それぞれの「必要」を関数化して体現しうる身体を持ち主だった。このような複数の合理性という観念のあり方への提唱こそが、坂口安吾「日本文化私観」における文化論であつたと言える。オリンピックの百メートル走は単純な機能美や西洋化追求の比喻ではない。オーエンスの走りは純粋に結晶化した複数の観念の関数化であつた。それは反民主主義の陥穽に落ちることさえなければ、美学たりうるのである。

注

- (1) 佐藤泉は『国語教科書の戦後史』(勁草書房、二〇〇六年五月)において、一九八〇年代以降の国語教科書において、「日本文化の理解と日本人の自覚が「国際交流」時代という高次の目標の下で重視される」ようになり、日本論は「海外進出を進める日本企業が必要とした自己表象」と分析した。二〇一〇年代以降の国語教科書の日本論は、経済的凋落を背景とした自己言及的な美学化の性質があるだろう。
- (2) もちろん、実際の国語教育現場において、どのような授業が展開されるかは教員に任されている。ここではそう解釈される余地のある教科書

であることを指摘するにとどめる。優秀な教員が積極的かつ現代の安吾論を反映させた授業を展開する可能性はある。

- (3) もっとも夏目漱石の場合は、学問制度の整備というより、日本における大正期の講演の見世物性にふれたものであつただろう。

- (4) 植民地化が欲望やイメージの複層化であり、そこに被植民地側の欲望も異種混交する(ことは、Mary Louise Pratt「Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation」(2007, Routledge)のインタクトソンの提唱によって指摘された。レイ・チョウ著、本橋哲也訳『ディアスポラの知識人』(原著「Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies」1993 Indiana University Press. 青土社、一九九八年四月)においては、東アジアの複層的な植民地化の構造が指摘された。日本や中国もまた、近代において、植民側と被植民側両者の性質を持つ。
- (5) 各選手のプロフィール情報、生没年、メダル獲得記録はウェブサイトをOlympediaを参照した。(https://www.olympedia.org/ 二〇一三年九月五日 21:42 最終閲覧)

- (6) 各選手の身長体重はウェブサイト Olympedia を参照した。(https://www.olympedia.org/ 二〇一三年九月五日 21:45 最終閲覧)
- (7) 大衆の熱狂を受け、「ドイツの新聞『ケルンシエ・ツァイトウング』は、オーエンスの体格は「模範的」で、「古代文明人の理想」を反映している」とオーエンスを絶賛したと言った。(ライヴイット・クライラージ著 高儀進訳『ベルリン・オリンピック1936 ナチの競技』原著「Nazi Games: The Olympics of 1936」2007, W W Norton & Co Inc; Annotated. 白水社、二〇〇八年七月)

(まんだだけいた、南京大学常勤日本語語言外国人教師)